

主観性の問題

加藤 正

唯物論の立場では主観性は如何に把握されるべきかの問題は、極めて興味ある題目だろうと思う。

主観の意味は、広狭雑多な仕方で説明されるが、唯物論文献では、まだその種々な取扱い方が整理されていない感もする。

主観とは元来、スブイエクツム（あるものの下に横わるもの）から発する語で、後者は、現在吾々の用いている主観とか主体とか或いは主語とかいう言葉の原語である。ところで、下に置かれる仕方にも種々ある。思惟だとか、行為だとか、そういったものの足下に、それらによつて処理さるべく投げ出されているものという意味では、スブイエクツムは対象であり、目的物である。こういう意味でのスブイエクツムは、いま本稿のスブイエクツム（主題）ではない。

あるものの下へその基底として当てがうことも、下に置く一つの仕方であろうが、こういう意味でのスブイエクツムは、過程や行為や関係や状態の基底であり、担い手であり、当体である。この意味では主観の代りに、主体という訳語が普通に用いられる。例^{たと}えば弁証法的過程の主体といえば、弁証法的に発展するところのものそのもの意だ。認識の主体と言えば、自己の展開が認識であるところのもの、即ち人類の思惟する頭脳としての純粹思惟である。生理現象の主体は生体であり、歴史の主体は人間社会であり、自然法則の主体は自然そのものである。法律で権利の主体と言う。物としての客体に対し、権利を行使する法的人格の意味だ。ある状態（スターツス・クオー）

を変革する主体と云うことも言われる。変革者そのものことだ。

基体、当体、担い手が、人間に関する限りにおいて、主体と並んで主観という訳語が用いられる。認識、意志、感情の担い手、或いは行為の担当者がそれである。

主観即ち人間主体を最も包括的に把握した例を求めると、『フォイエルバッハについて』（第一テーゼ）や『経済学批判の序説』における『主観（主体）』の用例など、蓋しその一つであろう。ここでは人間の活動全体の範囲を包括して主観（主体）と呼んである。この意味においては、主観性の唯物論的把握の問題は、外延的にも内包的にも所謂唯物史観の問題と一致する。換言すれば、ここでの主観は、対象的活動であり、現実的感性的活動である。即ち、『頭脳がただ思弁的理論的のみ振舞う限りは、実在的の主観は依然として頭脳の外部にその独立性を維持する』（序説第三節）と言われた、その実在的の主観である。或いは『全社会的生産行為の基礎』であり、その行為を通じて、あらゆる物質的精神的過程を生産する主観である。人間社会または社会的人間（『フォイエルバッハについて』第十テーゼ）である。

主観を、『頭脳の外部に独立性を維持する』実在的なるもの、对象的活動、感性的人間的活動、実践として把握することは、即ち唯物史観は、マルクスおよびエンゲルスから始まるのであって、それ以前の把握においては、人間主体の活動、主観の働きといえば、感受すること、意志すること、認識すること等を出でず、従ってそれらの現象の主体は精神であった。主観は意識作用の、思惟行程の、観念的なるものの主体としてのみ把握され、精神的なるものの内部でのみ存立するものとして表象されていた。現実の上で行われる活動が問題となる場合は、ただ精神上の主観に媒介されたる存立としてのみ把握された。『理解する思惟が現実の人間であり、理解されたままの世界が現実の世界である』（序説の第三節）と考えられたのである。

『実在的の主観が依然として頭脳の外部にその独立性を維持している』間に、芸術的、宗教的、道德的、思弁的

等の仕方では世界を把握するところの精神上の主観——問題は、この主観を唯物論的研究の対象となすこと、唯物論的に把握することにある。

精神上的の主観即ち頭脳の働きは、一般的に言えば意識である。意識とは意識されたる存在、頭脳の中に把握されたる存在である。意識が存在を頭脳に媒介する仕方、頭脳が存在を意識する仕方、頭脳が存在に臨む仕方は、思惟、感情、意志等として規定される。存在即ち対象的な関係や活動が意識に媒介されて観念上の諸形態、例えば芸術的、道徳的、宗教的、哲学的等の諸イデオロギーの形態をとる。ところで、実在的な主観即ち対象的な諸活動を観察すれば、頭脳の中に意識された諸観念に規制され、それに即して発展する活動形態も認められる。否、主観の現実的活動は多かれ少かれ一定の意識に導かれ、或いは意識された目的を追うという形態で行われるのである。こうした意味で、一般的に主観といえば、先ず、種々な形態の意識をもって対象と関係を結んでいるものと言ひ表わして差支なからう。主観が目的物または対象として意識しているものは客観である。同様な意味で、意識の中に、意識の下に、意識的に、意識に基いて生起する限りでの事象や過程は主観的であり、これに対して意識の外に、意識と独立に生起する限りでの事象や過程は客観的である。従って、実在的な主観、即ち人間活動の諸関係においても、この意味から客観的と主観的の二つの方面を分つことが出来る。例えば、社会の経済的生産条件の上に生起する『自然科学的な忠実さで証明し得べき』諸関係の展開を客観的過程というに對し、それぞれの意識の下にこの過程の中にあつて相互に關係を結んでいる社会的グループを、それらが何らかの形態における自己意識を持つ限り、その自己のことを、自己の立場から主観的力と呼んだりもする。要するに、意識と独立にそれ自身の必然性を貫徹する限りでの客観的側面に対して、これらグループの活動の、自己意識によつて結ばれ導かれる限りでの方面を指すのである。そうしてこういう主観的力自身が、ある關係においては、また客観なのである。例えば他の自己意識的主観の対象として。

主観と主体との使い分けは、意識のことを一言した以上、もつと限定することができる。人間的主体における何らかの諸関係や諸過程であつても、それが右に言つた意味での客観的な側面（意識から独立した実在的な側面）に即して取り上げられる限り、吾々の間では、その過程の主体に対して主観という表現を普通は用いないようだ。これに反し、主体が何らかの形で意識され、その主体における関係や過程が、その意識に規定されてのみ与えられる側面を問題にすれば、この意識には、主観という表現が用いられ、その主体の主観と呼ばれる。意識はその際自己意識である。そして主体の運動（または主体における運動）は、意識の立場からは、即ち主観的には、自己意識の発展として現われる。すなわち、その主体の客観的に条件づけられた運動が、その主体の主観即ち主体の自己意識の立場においては、意識的な行為、意識に導かれ、意識に規定された行為として現われるわけである。観念論は人間主体の行為をかくの如きものとしての側面から評価した。観念論は、過程を主観的に処理した。主観に依存して客観的なものを処理した。唯物論は過程を客観的に処理せんとするものである。客観的なものに依存して主観的なものを執^{とら}えんとするものである。困難は、唯物論の一般的立脚地において、意識的行為、即ち客観が主観に依存する関係を把握することにある。これに関して、理論的思索、芸術的創作、道徳的行為、法の制定、政治や戦争の戦術的政策的指導その他、こうした主題を扱わんとする唯物論的科學の特殊な困難さがある。ところで、この問題に入る前に、主観的なものの客観性もしくは客観的妥当性について一寸^{ちよつと}触れて置こう。

カントの提起した、主観性を深めることによつてその主観を客観性に高めんとする課題は、屢々^{しばしば}哲學の入門者をまごつかせるものであるが、これはただ純粹思惟なる主観を、直観や表象あるいは感性的印象の形式論理學的處理にとどまっていた段階から、直観や表象の奥にそれ自身の對象的な必然性によつて働きつつある客観的なものを把握する立場に移さんとする課題に外ならない。ただこの場合、観念論の本性上、思惟がますます全面的に對象に適合して行き、對象の運動の客観的な弁証法を自己のうちに把握して行く過程を然^{しか}るがままに表象し得ず、思惟の

自己自身への復帰、思惟の自己意識の発展として、専ら思惟の内部で表象したものに外ならない。ヘーゲルは思惟の自己意識または自己認識の中に、全対象世界を措定し且つ止揚するという問題を設定したが、現実的なもの創造者としての独立の主体に転化せしめられ、絶対理念と呼ばれたものは、実はより一層深い自己反省、自己意識、自己認識においては、対象的世界の客観的弁証法に規定されつつ自己の立場からその弁証法を把握する理論的思惟主観にすぎないのだ。巷間、カントからヘーゲルまでの、純粹統覚から絶対理念までの、理性的主体の展開は、唯物論においては人間の感性的活動即ち対象的活動（実践活動）として止揚されたという風な混雑に陥っている人が少くない（例えば本誌第十号一〇五頁の秋田氏の表象するところもそれである）。そうではない。自己の把握するものが自己自身であり、自己自身の理念において把握されるとき世界が成立するという風に自己を表象していた思惟主観が、対象世界をその客観性において把握する認識主観としての本来の形姿にまで止揚されたのである。そしてそのとき以来この認識主観の立場から、対象的世界（客観的自然および人間の実践活動）の弁証法を把握することが問題となったのである。そしてこの認識主観（それはエンゲルスの言った純粹思惟に外ならぬものである）の運動法則の分析、換言すれば『純粹思惟の過程の法則に関する学、即ち形式論理学と弁証論』が、従来の哲学の本来の遺産として唯物論の中に残ったのだ。過程を分析するものは過程の主体を執えねばならぬ。『認識論、論理学、弁証法の同一性』に関するこれまでのしつくりしない議論は、これらの三つの学問が分析せんとしているものは一個の主体の過程であり段階であることの把握を忘れてること、真実の主体たる純粹思惟、認識主観、人類の思惟する頭脳を執え得ていないことにその根拠がある。経験主義や経験批判主義は、いつでも主体のない過程を表象することにその特徴をもっている。現在の認識論学説は過程を論じながら、時には主体を忘れ、時には見当違いの主体を当てがって理解しようとしている風があるかのように思える。

そこで、主観的なものの客観性であるが、これは唯物論の立場からは極めて容易に答えられる。即ち主観的な

るもの——意識、意識的措置、意識的行為等——の客観性は、客観的なものの諸規定を、対象世界の客観的な弁証法を、对象的過程の弁証法が客観的に提起している諸課題を、自己の中に把握し体現し得ている程度に応じて決定できる。つまり意識とは意識されたる存在以外の何ものでもない。そして、単なる直観とか感覺的欲求とか快不快といったような意識の形態で对象的存在を把握している『主観的な』主観から、客観性の極めて高度な主観に到るまで、主観の意識の中ですますます明確な姿をとる内容は、一つの同じ存在であり、意識されると否とに拘らず、意識の外に独立性を維持する存在である。かかる存在を然るがままに意識しているとき主観は自らの立場において最も客観的であり、その主観によって意識的に運ばれる措置は、その存在の客観的な発展と合致するであろう。この立場にある主観は、自己が意識の中に把持するものは元来意識の外なる対象についての意識であるということ意識している限りにおいて唯物論的意識であり、自己が把持しているものが対象の直観や表象でなく、对象的存在に固有な発展行程であるということ意識している限りにおいて弁証法的理性的意識である。しかも主観の意志や感情の形態においてでなく、对象的必然性の形態でその存在を意識している限りにおいてこの主観は理論的（謂わば純粹）思惟としての意識である。

主観性の問題は狡義においては、意識の唯物論的研究の問題である。唯物論の立場からすれば、即ち意識とは意識された存在であるという立場からすれば、主観性の問題とは、結局、意識が对象的存在を執える全過程の研究の問題となる。ところで、右に吾々は主観的なものの中にもまた主観的と客観的の二つの規定を区別することを述べた。それに即して言えば、主観性の問題とは、結局、最も主観的な形態の意識から最も客観的な形態の意識への、人類の意識の展開の過程の研究である。

意識から、意識された内容（对象的存在に帰せらるべき諸要素）を捨象すると、内容を意識する形式が残る。智情意という風に分類されたりするあの形式、本来の心理学の対象であったところのあの形式である。

この中、知識とは、存在の多かれ少かれ正確な模写、対象的存在のかかるものとしての把握として説明される。(先験論は、対象的存在を知識主観の構成せるものと考えたが、それにしても、主観が、対象の単なる経験的受容からそうした客観的存在を構成するところの主観へ高まること、換言すれば、かかる客観的存在をかかるものとして把握するところに客観的な知識主観が成立すると考える。)それ故唯物論的知識論即ち認識論は、意識が対象をますます正確に模写して行く過程だとして説明がつく。直観や表象の形態から、悟性形式に規定された形態へ、それから弁証法的な理性的な形態への発展。対象の意識という面から見れば、対象について主観たる自己がある時ある所で知覚したままを表象するという段階から、いずれの主観もが共通的に承認し合うことの出来る段階即ち単にある一つの主観がそのときどきにもつ表象というにとどまらず、多くの主観の相互の表象が一致し合うという点において、個々の主観から独立したあるもの(客観的なもの)を意識する段階へ、更にその段階から、かく客観的として意識された諸内容が相矛盾し自滅する点において、未だ意識されては居ないがしかしこれらの諸内容を側面として自身の中に相一致せしめている知識主観の外なる存立を意識するところの段階へ、つまり主観の外なるものをますます全面的に主観の中へ意識して行く発展。この知識主観即ち理論的思惟の現在意識し得ている限りの最高の段階を前述の意味で唯物論的弁証法的と規定し得るとすれば、それ以前の知識主観においては、この知識主観は全面的に姿を見せていない。知識主観の運動形式を論理と呼べば、形式的、先験的、弁証的論理は、知識主観の自己展開の諸段階、その客観性への接近の諸段階を表現している。等々々という風に、とにかく知識としての主観は、主観の外にあるものを、主観の外に存立するものとしての形態においてますます適確に把握して行くことだということの説明がつく。

ところが、意志や感情は、意識とは意識されたる存在なりでは割り切れない要素があるように見える。知覚の中にはないものは知識の中にもない。対象的存在の中にもないものは知識という主観の中にもない。知識において対象的存在

在そのものの中にない規定を求めると、それはただ、多かれ少かれある側面に即して限定されていて、全面的に存在を包括していないということだけである。然るに意志や感情になると、存在の中にある規定だけでは説明がつかないように見える。例えば牛乳を飲みたいということ、牛乳はきらいだということ、これはいずれも牛乳についての意識だが、牛乳の規定だけでは説明がつかぬ。牛乳をいかなる側面から限定しても、意志や感情は指定されない、それらは牛乳の中からは開示されない。それらは存在によつて触発されて、主観の中に生ずる関係であり、それは存在に対応せず、主観そのものに対応する。だから主観を触発する存在的内容を捨象すると意志や感情は、存在を超越するものとして、存在から解放された自由なるものとして意識されるようになる。例えば、いかに深刻な感情をもつて対象的存在を知覚（体験）するかは詩人の天賦であり自由創造であるとか、意志は、自由であり、自由選択的であり、時には恣意であるとか。ところで、意志も感情も表象も知覚によつて、受動的に触発されるとすれば、同じ一つの主観であつては説明がつかぬ。そこにおいて触発が表象乃至知識として現われる理論的主観と、そこにおいて触発が意志或いは感情として現われる限りでの意志主観、感情主観とは、三つの別のものである。これらの主観は、そのままでは結合することはできないが、主観外のある対象的存在へなら帰着させ得る。私は、同時に意志し、感情を覚え、知識を持つ。この私とは何か。この私はこの菓子をおおうという意志の中にも、絵を美しいと感ずることにおいても、ものを知り認識することにおいても現われる。この私は知覚される対象の中にはなく、知覚するものの中に、従つて感官を具えたるものの中に、従つて神経系を中心に組織された個人の身体の中にある。がこの身体はかかるものとして一定の関係の下に生活する対象的存在である。意志からも、感情からも、知識からも独立している。主観から、意識から独立した主体である。このことが理解されると、意志とか感情とかは、ある対象（客体）との関係において身体的主体がある条件の下にとる運動がその主体の中の主観の夫々の方面に何らかの形で意識されたものであるとして解釈がつく。ところが知識はただ対象を対象として意識するだけである。知識は

対象的存在についての意識であるが、意志や感情は対象に対する私についての意識であり自己意識である。ある一定の意志や感情を保持する組織体の自己自身の立場についての意識がそれらの意志や感情である。従って、意志や感情は、ただそれを保有する主体の運動をますます正確に意識することによつて客観性を高める。が、しかし考えて見なければならぬ。かかる主体の運動が、かかるものとして、その客観性において把握されるとき、それはもはや意志でも感情でもなく、まさに知識となつている筈ではないか。観念論哲学は必然を自由に、知を意や信に止揚する問題に沈潜したが、ここ唯物論では、意志や感情が知識に止揚される。ただ問題は主体の客観的に規定された運動は、意識の客観性への高まりと関係なく、それ自身の新段階を拓いて行くので、その新しい段階に適應して新しい意志や感情が意識され、次いでそれがその段階の知識へ高まるという絶えざる循環が新段階毎に現われるわけだ。マルクスの『フオイエルバッハについて』の第一テーゼを思い出して見よう。従来の唯物論（唯物論とは対象を主観の外にあるものとして把握すること、即ち知識主観の運動、理論的意識のことである）は対象を人間の外にあるものに限っていた。しかし、人間主体の運動も亦理論的把握の対象即ち唯物論の対象たらねばならぬ。人間主体の活動はこれまで観念論が問題にして来たが観念論は、それをかかるとしての対象性において執えず、意識されるに価するものとしてでなく、意識するものとして、即ち表象し思惟し意志し感情するものとしてのみ扱った。従つて対象的なるもの、即ち本来唯物論が闡明すべきものを、意識の中へ止揚することに努力した。エンゲルスがヘーゲルの体系を評して顛倒した唯物論と呼んだのは、自立的な意識主体の中へ可能な限り対象的なるものをかかるとしてつめ込み、かくして一切を知識（哲学）の中に止揚することを問題にしたからだ。残念ながら、ヘーゲルは、彼が意識の中にあらゆる形態で把持した存在的なるものを改めて知識の形式で意識し直す問題を立てたとき、既にその存在的なるものが、新しい局面を彼の意識の外で展開しつつあるのを執え得なかつた。知識が、そして知識においては弁証論理における把握が最も客観的だとしても、それはあくまで主観の制限の中では最も客観的

であるというまでであつて、客観そのものは主観の制限の外にあり、この客観に適合しつつ知識主観は自己の制限を破るべきであることを忘れたからである。

意志や感情が、対象との関連における主体の運動の自己意識とすれば、その中に、主体の運動の客観的に進行する側面が多かれ少かれ表明せられている限り、それらの意識には知識主観が内在することになる。単なる感覚的触発によるもの、即ち単なる知覚が内在するにすぎぬもの（単なる知覚によつて媒介されたにすぎぬもの）はいまだ『主観的』たるにすぎぬ。その意志は衝動であり、恣意である。その感情は『個人的』であり、須臾的である。カントが意志や審美感情を判断を媒介として立することにより、それに客観性を附与せんとしたのは卓見であつた。これは唯物論から言えば、単なる知覚や表象に媒介された意志や感情が、主体の運動のより客観的な理性的把握に媒介されたものに高まる段階を逆倒的に若くは形式的に表象したものである。ある客観的な活動主体が、自己の活動の新段階を客観的に展開しつつあるとき、その主体の自己意識としての意志は、その客観性の高い形態においては、活動対象と活動主体とにおける諸條件を客観的に評価して居り、主体の活動の結果とそれを将来せしめ得べき諸契機とを意識しているわけだ。その場合、意志は主体が一つの地位から次の地位へ移る運動を主観の側から媒介する機能として現われる。一般に有機体の運動は神経系が表示する如く機械的諸運動を一個の合目的運動に止揚することをその本質とし、動物の固有な本能や習性を発達せしめたとすれば、脳髓を有する動物における意識の形成もまた、自己維持の本能的運動を一層高い合目的性を持った運動に止揚する一つの契機である。生物における意識および合目的性の発生の問題は生物進化の問題とともにここでは敬遠しておく外ない。要するに意志とは、現存の意識された限りの自己主体の運動を、意識されたる目的へ『屈折』若くは止揚若くは帰一せしめる要因である。意識されたる、というのは勿論多少とも客観的に、従つて多かれ少かれ知識として認識として意識されたるの意たることは、勿論である。本能や初源的な意欲においては主観は意欲する形態においてのみ機能し、いまだ主体として

の自己を反省し認識していない。目的追求の意識はこの段階では、主体が目的に適合せるや否や即ち能力ありや否やが反省し認識されていない結果として、単なる願望、欲求に、即ち主観的たるに、とどまる。

右の考察から次のことを知る。吾々が一つの主体がいかなる諸条件のもとに与えられているかを知り、その主体のもつ条件を知るならば、主体の意志が必然的に帰着すべき点を知ることが出来る。主体がいかなる願望、いかなる意欲を懐こうとも、それに客観性がなければ、即ち可能性に適合していなければ、主体の運動の上へ発現しない。従って吾々が個々の個人としての人間主体、ある時代における一社会としての人間主体、ある社会の一階級一結社としての人間主体を評価するには、それらの主観即ちそれらの個人や集団が懐いている意識によってでなく、それらの個人や集団の客観的條件、歴史的社会的生存條件から評価する必要がある。

感情についても同様なことが言える。単なる感官上の知覚に媒介された感情や、直観表象に媒介された感情は、妥当性が少く反省によつてた易く止揚される。即ち与えられたる諸事情の反省乃至認識に立脚し、主体の規定された地位の自覚（意志にまれ認識にまれ）に基く感情は、それだけに客観性をもち、主体の置かれたる地位に応じて、感情は普遍的ともなり典型的ともなる。感情は与えられた現実を感受するのみでなく、意識の中に表象を作り上げる。しかし乍ら構想されたる表象が、各人の共通体験に適合し、各人が自己の直観や判断をもつてその表象を容易に再構想し得るといふことがなかつたら、そうした構想は単に主観的にして妄想に類するだろう。しかもその共通体験が歴史的に必然的なもの普遍的なものであればある程、それに適合した構想は、客観性の高い、深刻で普遍性のある感情の世界を開くであろう。唯物史観の理論家が必しも優れた作家であり得ないように、文学や芸術の世界は推理の世界ではなくて構想の世界である。しかし、必然性を内包しない構想、客観性のない弁証法的推論と一致せぬ構想は主体の根底的な境地を感得せしめない。主観の内奥を意識の前に表象せしめ得ない。構想され表象されたるものは一つの限界をもつ。サンボリズムだろうとロマンチズムだろうとレアリズムだろうと、その構想にある

種の必然性があることが必要だとすれば、いかなる芸術家も現在の諸条件の下に人間主体の活動が客観的現実の上に産み出す以上の要素を芸術品の上に創作することはできない。

これを要するに、意志とは、現在の主体が止揚しやうさるべき或いは到達すべき境地（それは構想されたものであつても、推論的に規定されたものであつてもよい）の意識に従つて、主体の活動を規制することである。この境地が何らかの形で到達されるとき、普通は、意志も構想も推論も、その境地の現実的な認識に止揚しやうされる。意志は目的を達するか逸するかして解消し、感情は構想が現実化するか崩壊するかして中和される。

意識は既に与えられた感性的現実のかかるものとしての把握に基いて、将来されつつある現実を、予め自己独特の仕方しほうで執とえることをするが、その各種の形態において最も客観性をもつものは弁証法的推論である。

あらゆる形態の意識がその客観性を深めるに従つて唯物論的弁証法的な認識しんしきに止揚しやうされることと並んで、理論的意識のいま一つの特徴を指摘する必要がある。

同じ理論的意識の分類の中に入れられるとはいへ、論理的意識にあらざる直観や表象は、誰の直観であり、誰の表象であるかが問題である。ある主観、ある意識は、これらの場合、その保有者として特定の間人主体を予想せざるを得ない。このことは特に、意志或いは感情としての主観に当嵌あてはまる。誰の、如何なる人の意志であるか感情であるかを問わずして、それらの意識を論ずることはできない。自己の意志は、自己以外の主体が懐くことはできぬ。自己主体の運動が意志として反映するのは自己の主観へだけであつて、他の主体の主観へは認識として反映しようとも、意志としては反映しない。感情もまたそうである。然しかるに理論的認識だけは趣が異なる。ある主体の運動は、その客観的な姿においては、必しもその主体の主観に反映するとは限らない。否寧むしろその主体の主観以外に理論的訓練の高い主観があれば、その主観の方に却かえつて正しく反映し把握されている場合が多いのである。蓋けだしその主体の主観においては、意志や感情が先入主となつて、客観的認識の過程を阻むのはあり得ることだから。主観の感情

がある境地を構想し、意欲がそれに結びつくときは、改めて論理的に把握し直すこと、弁証法的に推論し直すことは簡単ではない。

しかし、認識は意志でもなければ、感情でもない。それが行為を導き得るためには、またある目的を直観せしめ得るためには、ある主体の意志や感情の形に翻訳しなければならぬ。その主体の意識が既に理論的に思考することを学んでいるならば、認識をそのままその主体の主観に取得せしめ得る。そして最も高い形態における活動、意図と意志とを起させ得よう。だがもし、その主観が理論的推論に訓練されていないとすれば、直観的表象や文学的構想の形で目標を意識せしめ、かくして意志をその主体の主観に起さねばならぬだろう。

主体についてはマルクス以来、吾々の知識は素晴しく発展した。その知識によつてのみ吾々は主観性を唯物論的に解く手がかりを得た。一定の主観的意識をもつ人間主体の形成は、この意識において行われるのでなく、人間の生産活動によつて行われるのだということがせんめい闡明されて以来、従来人類が産出したあらゆる意識形態は、あらゆる形態とあらゆる本質をもった歴史における人間主体の自意識の諸形態として把握されるようになった。だがまたそれと同時に、いままでも唯物論的な、理論的な把握の外にあった人間主体がその客観性において、理論的唯物論的に、ありのままに把握されることになった。唯物史観がこれである。それによつて吾々は、たと例えばプロレタリアート、ファシスト、インペリアリスト、ブルジョアジー、小市民等のイデオロギーを知るのみならず、彼等が客観的に何であるかを知る。彼等の活動の意義および条件を知る。従つて、意識が意識されたる存在である限り、ある人間的社会的主体の主観の中に意識されている存在は、その主体を客観的に分析することを知らずかの理論主観においては、より真実な、より全面的な形態で把握されているのが普通である。

これについて巷間ちやうかんの誤解を一掃しておきたい。例たとえばプロレタリアートの歴史的地位、その発展の諸段階における活動の意義および条件のせんめい闡明は、全く客観的理論的にこれをなすことが出来るのであつて、かかる認識は、実践

において、即ち歴史の現実的進行に照してその真理性を検証されしよう。だが、その限りにおいて理論は唯物論的であり、更にはマルクス主義的であると言い得ようとも、いまだプロレタリアートのものではないと言えず、またプロレタリアートの立場において得られたものとも、プロレタリアートの主観から生れたものとも言い得ない。プロレタリアートの自己意識（それが個々の成員の意識に現われているにもせよ、また大多数の成員の主観に共同的に保有されているにもせよ）の中には、その階級の客観的存在様式が必しも意識されているとは限らない。その自己意識はプロレタリア階級のものであるが、しかしその限りでは唯物論的であるともマルクス主義的であるとも言えない。その階級主体の客観的実践の展開の過程において構想力は自己の主観の中に自己の表象を立て、實際的な判断はその仮想的な方面を破って行くだろう。しかし、そうした謂わば『経験主義的』把握にのみ依存する限りでの階級主観からは、歴史の弁証法についての意識は生れて来ない。それは主観が弁証法的論理に訓練されるに従って、推論的に把握されるものだからである。歴史とプロレタリア階級に唯物論的理論的分析のメスを入れることは、いまだその階級の立場に立つことではない。この分析が成功し、この階級の客観的運動が把握されるに到れば、たしかにその階級の立場はその認識に反映するだろうが、しかし、その認識を持つこと即ちその階級の立場を把握することと、そこに立つこととは同じではない。それは恰度ちやうどファシズムの本性を把握することが、ファシストの立場に立つことと同じでないのと同様である。そしてこの段階においてプロレタリアートの立場に立っていると言うことがもし言い得るとすれば、それはただ、歴史事象におけるプロレタリアートの積極的な、最も根本的な役割を承認しているという限りにおいてであって、それは客観的理論的分析の前提について言われるのではなく、その理論的結果においてのみ言われるのである。一つの社会事象の分析に際して、その事象の全経過に内在するプロレタリア階級の役割をせんめい闡明し得ない場合は、たとえばいかにその階級の一般的使命の意識から出発しても、その主観はその限りプロレタリアートの立場には立ち得て居ない訳だ。そしてプロレタリアートもまた、自己の役割がせんめい闡明され

規定されていない事象に対しては、何等の意識的な働きかけを起し得ないだろう。プロレタリアートの立場に立つとは、本来意識内の過程に止らず、実践の問題である。初原的には自ら剰余価値の生産者となり、その階級の一員として生活し、意志し、感情することである。もつと客観的には、プロレタリアートの自己意識に従って、その自らの生存地位を維持せんとする意志を、自身の行為によって遂行することである。さきの如くただ理論的にこの階級の積極的使命を認識していることはたとえこの階級の立場に立つ一つの形態と言い得ないことはないにせよ、何ら実践と統一されていない。いまの形態は実践的にはこの階級の立場にあるとはいえず、その実践は、この階級の歴史的使命の認識とは統一されていない。実践の従って意志の最も客観性の高い形態においては、階級主体の運動の客観的な認識の成果が主観的意志の形態に止揚しやうされていなければならぬ。プロレタリアートの立場に立つ最も高い形態は、階級主体の運動の客観的な意義および条件の認識を、この主体の主観に意識せしめ、その実践意志を客観的条件に出来るだけ即して発露せしめるにある。そのための教育的組織的活動にある。このとき理論的認識は、プロレタリアートのものとなったのである。即ち実践主体の主観たる形態をとつたのである。即ちその実践主体によって遂行さるべき政策および戦術的指針としての形態をとつたのである。この形態において、客観的な即ち唯物論的な理論は、一定の主体の実践と統一され、まさにその主体の固有の立場の自己発表としてのパルタイリヒカイトを持つ。しかもこの主観的意識は、自己の主体の（他主体との相互関係における）運動の客観的認識——それが誰の主観において取得されているかは規定され得ない——を絶えず学まなび、ととることによって、客観的な自己、固有の自己、本来の「パルタイリヒカイト」の立場に絶えず副そわばならぬ。

三年前に行われた理論の「パルタイリヒカイト」をめぐるごたごたにおいて、パ論派の諸君は、理論と実践との統一の問題を認識論の問題だと考え、君とか僕とか太郎とかが、プロレタリアートの実践の立場において一定の認識を取得する問題だと解釈した。これは実際的には無意味なのだ。何故なら、プロレタリアートの階級主観の中に生れ

る、意識は、知覚表象や知覚判断の上に架せられた意志や構想の形態をとつていて、文学はこれを写すこともできようが、理論的認識はそれらの意識に表現された内容を、その意識の形態から抽象して、それ自身の固有の形において反省するのだから、その内容が本来誰の主観の中に如何なる形で意識されて取上げられているかは問題でないからだ。要はその内容を、その客観性において分析する理論的能力を君や僕や太郎が持っているか否かにかかる。それに、主体が客観的に具備し或いは当面している諸條件は必しも常にすべてその主体の主観に何らかの形で意識されているものとは限らない。そういう訳で、ある一つの認識が、実践から生れる、(換言すれば、実践主体の意志や構想の中に包摂された形で生れる)のと、実践の意義や條件が、客観的に、弁証法的思惟主観の立場において学び、とられるのとは全く別のことである。ある実践主体の主観に依つて、太郎や次郎がある客観的唯物論的認識に導かれ得るのは、その主観が既に客観的認識の方法で取得せられた認識を自己の政策および戦術的方針の形態で把握し得ている場合に限る。パ論派の諸君は、取得された唯物論的認識は、それがいかなる事情のもとに得られたものでも、その限りでは単に客観的で、主体性の規定をもたないことを承認しない。そして真の客観的な唯物論的な理論はプロレタリアートという階級主体の主観にのみ生れると考えたから、唯物論的な認識論的立場に立つことでもつて、既に本質的にはプロレタリアートの立場に立っているかの如く自己を表象した。その結果、その階級主体とその客体についての自己の理論的認識を客観的に深化すること、そしてこの認識をその実践主体の主観として形成すること、その認識をその特定の主体の意志および構想の中に取得せしめ、その主体の意識的実践の客観性を高めること——この問題、理論と実践の本来の統一の問題、パルタイリヒカイトの最高の発揚の問題が忘れられた。換言すれば、階級的大衆の政策的戦術的指導の問題、階級的大衆の自己意識的な力に基いて目標を戦いとる問題、主観性の最大の問題の一つが、それによって、横の方におしやられた。(これは当時のパルタイそのものの事情が、哲学理論家の頭にも反映したのに外ならぬ。それは大衆的政策の確立によって前進する代りに、即ち大衆の実践の上

に根を下ろす代りに、自己が取得した理論を大衆の戦術的指針に鍛える代りに、そのまま自己グループの実践の指針として行動した結果は、階級的基礎のないインテリゲンチヤ・グループの分派闘争となって昇華した。）

最も勝れた哲学理論家においてすら、この問題がいかに領得されていなかったかの例は永田氏の『歴史における主観的條件の意義』（本誌二六号または『唯物論哲学のために』にも採録）を見るとよく分る。そこでは、主観的なものが単に主観的なものとして種々とり上げられ、その意義が主張され、それと客観的條件との外部的な相互作用が言われているだけで、客観的條件の主観的なものへの転化の弁証法が、即ち客観的なものが如何にして主観の創意、目的行為、能動、ポイエーシスとして、作用するかの形態の分析が無視されている。従って同君にあつては歴史における主観的なものは、客観的條件に制約された限界の中では、自由に、『自由選択的に』振舞うところのものとして表象されている。これは自己の限界を認める限り唯物論であり、自由創意を認める限り觀念論であり、合して折衷論となる訳だが、永田氏はこの、觀念論のことを弁証法と呼び、合して弁証法的唯物論ということにしてゐる。同氏においては、歴史過程における主観的なものは実践的能動性一般という抽象的なカテゴリーに昇華せしめられている。客観的なものに対して一の能動性であるところの主観的なものは、実は対象的諸條件によって媒介された存立であること、主観の能動性は対象的媒介が意識され掴まれることによつてのみ發揮できるのだということ、自由は必然性に到達する手前においての意識の中にあるのではなくて、必然性を認識してそれに意識的に適応することの中に存するのだということ、このことの認識は唯物論の核心である。従つて主観の能動性は、媒介的契機を吾から自由に勝手に執えたり執えないでいたりすることによつて、結局は客観的必然性の奴隸となる点に現われるのではなく、あらゆる媒介的契機を通じて客観的必然性を自己の行為の中に体現せしめることの中に最も高い形態で現われるのだ。『国家の歴史、諸国の歴史、階級の歴史においては、成功と勝利のためのすべての可能性があつたに拘らず、指導者がこれらの可能性に気付かず、それを利用し得なかつたためにこれらの可能性が

無駄となり、階級が敗北を喫したというような場合がよくあつた』——これはスターリン氏の述懐だ。彼も亦主観の能動性に対して唯物論的観点を把持していることがよく分る。一つの主観が、もし媒介的契機（可能性）を逸し、自己に課せられた必然性の実現に高まり損ねたら、その主観は別の必然性に左右される。永田氏がどういう気持ちで彼のこの言葉を引用したのか、僕には一段呑み込めないが、スターリン氏が主観的行為を、一定の必然性の枠内における『一義的でなくて選択の余地ある被規定性』などと考えていないことだけはこの引用句から明かだ。彼の言葉の中には、現実的勢力の現実的な能動性を指導しつつある一つの主観が表明されている。永田氏の主観の中には、媒介されざる能動性一般が切り離されて空想されている。従つてそれは観念論的に規定され、謂わばカテゴリーシエ・アクチヴィテートとして表象され、科学的に基礎づけ得られないものとなつている。同君は『主観的要因の展開そのものの中にすでに客観的可能性の存在の証明が含まれている』と主張する。先ずやつて見る。やつて見てうまくいったら、そのための客観的條件が揃つていた訳なんだ。失敗すれば、まだ條件が揃つてなかつたのだ。こういう、能動性を抜いて考えると、客観的條件が揃つているのに、それに気がつかず、逸してしまうことになる、と。然し、一つの媒介的契機（可能性）を意識し得るか否か、それを然るべく評価し得るか否かは、経験的な或いは理論的な判断力の問題である。一定の目的を将来せしめ得べき契機、媒介、可能性を、提示し得ず、指示し得ず、人々に領得せしめ得ない指導者、ただ活動的な能動性一般を説教する指導者には、いかに決意ある大衆も危つかしくつて行けないだろう。

主観は、その志向するところによつて判断されてはならぬ。それは観念論だ。主観は、それが具備し、それが把持している現実的な諸条件諸契機によつて判断されねばならぬ。それが主観の唯物論的な見方であり、この見方において始めて、主観は対象的主体としての自己を客観的に反省し、自己を批判し、自己を高めることが出来る。主観的能動的に働きつつあるものの客観的な考察、これが本来唯物史観の問題である。永田氏は新しい『弁証法的』

史観を建設しようとしているかの如くに思われる。『実践的見地から、過程の担い手たる階級的主体の見地から考察する』新史観がそれである。即ち、歴史を、その如何によつて歴史過程が別の相を呈し得ると言ったような能動性の立場から評価すること、換言すれば、客観的に規定された或いは客観的に存立している社会的物質的力を客観的に評価することではなく、選択の相対的自由を自己に保留している底の能動性、現実的に発動させるさせないは自己の裁量次第であるような能動性、観念的な範疇的な能動性の概念から歴史を評価することを提唱されている。

一体、社会において行われる諸行程はすべて意識を伴った行程であり、従つて社会におけるあらゆるグループは、自己の主観的な能動性により、意志の相対的自由を発揮しつつ、相互に関係し合つて歴史を作っているのである。だから、この主観的側面から歴史の過程を評価せんとすれば、帰一することを知らないだろう。そしてまあせいぜい、自己の社会的グループの主観から評価すること、即ち自己のそのときどきの社会的プログラムから事象を評価するに終らざるを得ないだろう。唯物史観は人間の行動の、能動性の発揮の法則を解剖したのだ。人間の行動、人間の能動性を通じて歴史の上に作用する必然性を解剖したのだ。マルクスは『フォイエルバッハについて』の第一テーゼで、対象を活動として捉えることを教えているが、活動的能動の対象或いは対象的活動から歴史の客観的必然性を抽象して人間活動の彼方に表象するものは超越的観念論か、直観的唯物論である。神だとか宿命だとか人類の自然秩序だとか社会の自然推移の観念とかがそれである。客観的必然性が人間活動の彼方に投影され、ただ人間に働きかけられる受動的なものとして表象されると、勢い活動的なものは、その此方において独立せしめられ、自由意志的に、客観的必然性へ働きかけ、その相に变化を与える主観的な能動性として表象されるようなことになるのだ。永田氏の論文を貫くのは、客観的必然と主観的自由との二元論の折衷である。同氏に欠けたるものは、客観的必然は主観的追求の能動的活動そのものの中を貫いているのだということ、能動性そのものの法則だということ、客観的必然を構成する契機の意識が能動性であるということの認識である。自己のあらゆる形態の能動的行為

は、客観的必然性が歴史の上に作用する形式である。必然性を人間活動の外に表象することは、一個の理論的抽象であり、過程のある面を単純化して表象する一つの方法ではあるが、現実的には、必然性はただ歴史上の諸社会グループの意識的行為の交互関係の中にのみ作用するのである。

事象を『一定の社会的グループ』の見地から評価する』永田氏とは反対に、レーニンとは『カルル・マルクス』の第五章（本誌四三号一二九頁下段の指示もこの章のことだ）の首で、『一定の社会の例外なく一切の諸階級の相互関係の総体の客観的考察、従ってまたこの社会の客観的な発展段階の考察、この社会と他の諸社会との相互関係の考察——これのみが先進階級の正しい戦術の基礎である』と言っている（戦術とは、ある主体の主観的目的意識的活動形態である）。事象は一定の社会グループの見地からでなく、客観的に把握さるべきである。一定の実践主体の主観からでなく客観的に、その主体をも含む社会関係の総体性において、把握さるべきである。しかし客観的考察はあくまで客観的考察である。客観的唯物論的認識は結局、社会的活動において一個の社会的主体が形成され、その主体の具有する諸条件によって特定の社会的活動が止揚される過程を闡明し、且つその主体の特定の段階段階における活動の意義と条件を闡明するにとどまる。その闡明されたる必然性は元来この実践主体によって客観的に実現されつつあるのだ。残されたる問題は右の闡明が、この主体の主観に取得され、この必然性が主観的意識的にも遂行されることにある。特定の社会的活動の止揚を認識するのみでなく、それを遂行し、実現するためには、特定の社会的主体の現実的力に拠らねばならぬ。同じレーニンの言葉によれば『マルキストは次のことを必要と考える——社会構成の機能と発展の諸法則を客観的な研究の下に置き、『それとの関連において事象を把握すること、また『資本主義社会を構成する諸階級を詳細に究明すること。』』而して批判についていえば、一の特定の階級の見地からなされるときにのみ、且つ、事実の上に進行しつつある社会行程の正確な表式に基くときにのみ、根本的だと考える』（ナロドニキ主義の経済的内容、第二章）。

以上のことによつて、レーニンが同じ書で『あらゆる出来事の評価に當つて卒直マ且つ公然カに一定の社会的グループの見地に立つべきこと』を言ったのも、決して一定の社会的グループの主観の意志や構想に反映せる姿において出来事を評価する意味に読んではならないことは明かだ。否、客観的な理論的唯物論的立場から評価された認識に従つて、一定の社会的グループの能動性を發揮せしめる実践的遂行の立場を述べているのだ。(このことを本誌四三号一二八頁の論述に就つて起り得べき誤解に備えたいと思う。)

『大川生』氏は唯研ニユース四五号で『実践について』という非常に興味ある感慨を述べられた。要点を抜書きすると『フトしたしゅん間に、何ということなしに、僕はどうにもやり切れない気持ちにおそわれることがある。……これは僕がほんとうに実践していないところから来る極めて危険な気持であるに相違ない。……吾々にはただ一つの実践があるだけである(これはいうまでもなく機械的に理解さるべきではない)。……ただ一つの正しい観点に立つて批判することがほんとうの実践である。』

『吾々』にとつてのただ一つの実践とは、わが国の労働者階級の固有の歴史的使命のための実践の意味に解してよかろう。尤も機械的に理解してはならぬというのだから氏の場合は、理論家、討論家、理論的批判家としての資格で、この活動をもつて、右の実践に参加することだと解して置こう。そこでただ一つの正しい観点からの批判という実践が提出される。事象の実践的批判、即ちその変革、克服と止揚しやうは、一つの実践主体の現実的力に基いて遂行されねばならぬとすれば、理論的批判は、ただその実践的な即ち現実的対象的な批判の行程を、出来るだけ客観的に、事実の上で進行するがままに、理論的に把握しつつ、その必然的結果を推論すること以外の何ものでもない。従つてこの理論的批判には、一定の現実的な実践主体の活動の意義が、その具体的な客観的な形で表現されていなければならぬ。そして、もし理論的批判が闡明せんめいした主体の活動の客観的意義を、その主体が未だ主観的に意識していないとすれば、その理論的批判は、とりも直さず、その主体にとつては、自己の能動的意志において遂行し得る

し、遂行しなければならぬ実践的課題の指針となる。『ただ一つの正しい観点からの』理論的批判とはこれ以外にはない。そしてそれは同時に、一つの実践主体の立場からの批判ということの真個の意味でもある。

右以外の何等かの『観点』からの批判は、唯物論的批判でもなければ、労働者階級の立場からの批判でもない。それは観念論的批判であり、一定の実践主体の立場にあらざる単なる思想家または思想グループの立場からの批判となる。何となれば、右以外の意味の『観点』は結局、ある主体がある場合に主観的に意識している形態において一つの事象を評価することに終らざるを得ず、その形態を知ることが非常に有益な仕事の一つではあるが、そのままでは、即ちその主観の立場からは、その形態に客観性があることを判断する根拠がないからだ。(実践的検証とというのは、主観的には案外迂遠な証人だ——というのは、検証の成果を客観的に評価できない主観には、検証は無意味だから。)それはただ独断的に主張され得るにとどまる。そしてそれを主張する思想的同人にとつてのみ客観的真理たるにとどまるからだ。(現実的な特定の階級の立場における観点をプロレタリアート一般という抽象理念に代える学派については、本誌四三号一二三頁以下を参照。)

ローマ教会には法王無過誤というのがある。神の御旨によって法王の座に上った限り、その宣べるところには過誤はあり得ないというのがそれだ。現実には、決して誤らない認識と行動指針を常に生み出し得る主観的実践的立場なるものはあり得ない。それは、対象的実践の客観的な認識から絶えず取上げられ、絶えず豊富にされ、絶えず是正されるところにのみ、『大川生』氏の所謂『吾々』の活発な協力のあるところのみ確立される。『ただ一つの正しい(主観的)観点』が『吾々』の外にどこかの立場において与えられ、その『観点』に立って批判することがほんとうの実践なのではない。それは形式主義か、観念主義か、官僚主義だ。『吾々』が絶えず自ら客観的認識を取得しつつ『正しい観点からの理論的批判』を遂行することが、ほんとうの実践だろう。——本当の、『ほんとうの実践』は、この理論的批判に従い、特定の社会的主体の自己意識的な力によって、実践的に批判することであるの

は言うまでもないとして。

主体には、既述の外右の『吾々』の間にだけ通用する用い方がある。ソシアリストの政治的党派の意味である。ある一定の歴史的社会的課題の担い手の意ならば、むしろ社会階級としてのプロレタリアートそのものを指すのが本当だろうが、ここではその歴史的過程の政治的契機の直接的な担い手の意なのだろう。もっと正確に言えば、一定の歴史的課題の担い手たり主体たる社会階級を、その課題に沿って意識的に運用する主観的力、その運用の主体、政策的戦術的指導の主体の意なのだろう。この『主体』の主観には、その実践的地位からして絶えず最も客観的な正しい認識が生れるというのは、傍観者の混乱した表象である。帽子はかぶるのであって、頭から生えるのではない。その主観（レーニンの所謂『先進階級の戦術』）は、歴史的事実の上に進行しつつある過程の段階段階の本来客観的な考察によつて絶えず樹立されねばならぬというのが真相だ。この客観的な考察を誤ることも大いにある得るのであって、その限り、『主体』はその地位を失墜するのは歴史の示す通りである。その『地位』からしてその『主体』に生れる主観的意識の諸形態と、その『地位』を維持するために把握しなければならぬ客観的認識とは区別しなければならぬ。

大部話が尾籠びろうに落ちたが、主観性の問題は広般か且つ多岐である。人類の歴史に現われる客観的对象的な人間活動のあらゆる主体において形成されるところの諸々の意識および意識的創作の形態を研究することは極めて興味ある題目で、現代哲学者の野心もその辺に向いているように見受けられる。しかし、主観性の唯物論的な解明の仕方、主観的意識の客観性の理解の仕方において、数年に亘わたる模写論の呼声かかわにも拘からず、未だ唯物論的視角の一貫性が確立されていないと思われるので、以上一寸感想をまとめた次第です。主観性の問題で最も大事なことは、吾々が特定の主観を解説したり、描写したり、規定したりするにとどまらず、主観の形成の条件を意識しつつ、自ら、歴史の客観的進行が要求する主観意識を獲得し、この進行を自己の意識的行為、あらゆる形態の主観的ポイエーシス

において體現することを学ぶにあつたと思つ。

一九三六・五月・六月

（『唯物論研究』第四九号、一九三六年二月）

- 『加藤正著作集』第一巻（「加藤正著作集」刊行委員会、一九八九年一二月）所収。
- PDF化するにあたり、旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、 $\text{dvi} \rightarrow \text{pdf} \rightarrow \text{m} \rightarrow \text{x}$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。